令和 七 年度

四天王寺東高等学校入学試験問題

国 語

注意 答はすべて解答用紙に書きなさい。
句読点、記号も一字に数えます。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ドストエフスキーの『死の家の記録』に究極の拷問という話があります。それは「無意味な労働」のことです。①半日かけて穴を掘って、半日かけてまた埋めていく。その繰り返しというような仕事に人間は耐えられません。

しかし、同じような労働であっても、そこに他者との「やりとり」さえあれば人間は生きてゆけます。たとえ、穴を掘って埋めるだけというような作業でも、人がいて、一緒にチーム組んで、②プロセスの合理化とか、省力化とかについて、あれこれ議論したり、工夫したりしながらやれば、そのような工夫そのもののうちに人間はやり甲斐を見出すことができます。後で埋めるだけの穴であっても、上手く掘ったり、手間をかけずに埋めるノウハウを開発して同僚からの敬意を勝ち得るというようなことがあれば、人間はそんな仕事にでも喜びを見出すことができます。

仕事の話で人々が忘れがちなのは、③このことです。

仕事の目的は結果として価値あるものを作り出すことではないのです。それなら、どんな手段を使ってもよいということになります。仕事の目的がお金を儲けることなら、効率的でありさえすれば何でもいいはずですが、でも、実際にはそうではありません。

人間が仕事に求めているのは、突き詰めて言えば「コミュニケーション」です。ただ、それだけです。

やったことに対して、ポジティブなリアクションがあると、どんな労働も愉しくなります。人にとって一番つらいのは、自分の行いが何の評価も査定もされないことです。応答が返ってくるなら、人間は何でもやります。ピンポンやテニスだって、玉が行って返ってくるだけです。でも、相手がいるから楽しいんです。

ある社会学者の方から聞いた話ですが、昔、まだコンピュータが初期の頃、アメリカで「イライザ」というソフトが開発されたことがあります。④「イライザ」は、こちらが何かメッセージを打ち込むと、返事をするソフトです。

「私はウチダです」と打つと「あなたはウチダさんですね」と返ってくる。「私今日疲れてるんです」と打つと、「あなたは今日お疲れなんですな」。

新しい情報を「イライザ」は伝えるわけではありません。自分が発したメッセージに対して、「あなたのメッセージを受け取りました」というメッセージを返してくるだけです。でも、これを※神経症の治療に使ったら、⑤はつきりした効果があったそうです。

ただ、ことばを送り、ことばを返すという「やりとり」があるだけで、人間は「もつ」のです。

要するに、「やりとり」をするのが人間性の本質だということです。それさえ満たされれば、人間はかなりの満足を覚えることができます。

「やりとり」というのは、「交換」のことです。人間は交換が好きなのです。

ネアンデルタール人とクロマニヨン人の違いはここにあるということをも三浦雅士さんが書いています。

三浦さんによれば、⑥、というのです。別に、要るだけ栽培したり、要るだけ採っていればそれで足りたのに、交換することが愉しかったので多めに作るようになった。そして分業が生まれ、階級が生まれ、国家が生まれた、というのが三浦説です。

この解釈は交換の本質を **a** 鋭く 衝いていると思います。

近代の資本主義というのは、貨幣というものを中心に動いていますが、マルクスが **b** ブンセキ した通り、貨幣はそれ自体には何の価値もない商品です。唯一の価値は、これを持ってゆくと何か交換してくれるという点にあります。

交換することだけに使える商品、それが貨幣です。

だから、お金は退蔵するものではありません。使うものです。

交換によって財貨やサービスがどんどん動き回る。ものが動き回るのを見ていと、うれしい。だから、どんどん交換する。

⑦ それは会話と同じです。

ことばの贈り物をする、ことばが返ってくる。その往還の中で、自分があるコミュニケーション・ネットワークの中にいるということが実感される。自分の存在が承認され、必要とされていることが分かる。

だから、ぼくたちはことばを交わすわけです。

恋人同士の会話というのは、「イライザ」と神経症患者の対話とあまり変わりませぬ。

「愛してる」「私も愛してる」ということばを延々と繰り返しても、恋人たちは少しも **c** アキ ません。

「ねえ、もう君がぼくを愛しているのは分かったからさ。何か違う話しない？ 日本 **d** ケイザイ の今後について、君どう思う？」というようなことを言う恋人たちにはあまり幸福な未来が訪れるようには思われませぬ。

それは、会話のほんらいの目的が有意な ⑧ にあるのではなく、ことばを発する人がこちらにいて、ことばを感謝とともに受け取り、それに返礼する人があちらにいる、という事実そのものを確認することにあるからです。

人類学の用語で、こういうようなメッセージの交換のことを「交話的機能」と言います。「交話的メッセージ」というのは、電話で「もしもし」というのと同じで、「このメッセージはあなたに届いていますか？」という「コンタクトが成立していることを確認するためのメッセージ」のことです。

言語学者のローマン・ヤコブソンは『一般言語学』という本の中で、「交話的機能」

問 6 — 線⑤「はつきりした効果があった」とありますが、どうして効果があったのですか。その理由として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が同じことばを繰り返しても、相手を不愉快にはさせないから。
- イ 自分という存在が認められ、相手に必要とされると感じたから。
- ウ 自分が発したメッセージに対して、単純な答えを返してくれるから。
- エ 自分はことばを打ち込むだけで、相手に労力を割かなくてよいから。

問 7 空欄 ⑥ に入る文として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 山の民と海の民は収穫物が余ったから物を交換したのではなく、交換したかったからたくさん収穫したのだ
- イ 山の民と海の民は交換しなかったからたくさん収穫したのではなく、収穫物が余ったから物を交換したのだ
- ウ 山の民と海の民は交換が自身の収入につながることに気づいたのではなく、作物を栽培しなかったただけなのだ
- エ 山の民と海の民は作物を栽培しなかったのではなく、交換が自身の収入につながることに気づいたのだ

問 8 — 線⑦「それは会話と同じです」とありますが、この一文を説明した次の文章の空欄に合う言葉を、それぞれの指示に従って、本文中から抜き出しなさい。

「イライザ」との会話と A (漢字二字) は、 B (十三字) けれど
C (漢字二字) することそのものに愉しみがあるという点で同じである。

問 9 空欄 ⑧ に入る言葉をここより後から探し、五字以内で抜き出しなさい。

問 10 — 線⑨「ここにあなたからのメッセージを一言漏らさず聞いている聞き手がいますよ」という一文から、主語となる文節と述語となる文節をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア ここに イ あなたからの ウ メッセージを
- エ 漏らさず オ 聞いている カ 聞き手が
- キ いますよ

二 次の文を読んで、後の問いに答えなさい。

ふいに、彼女が声を荒らげた。

「お兄ちゃん、いいかげんにしてよ」

思いの外、響いた声に我に返ったのか、また声を落として会話に戻る。

これでわかった。彼らは兄妹だったのだ。そう思えば、※1 鶴岡氏の大人げない態度も、身内に対するものだということがわかる。名字が違うのは、妹が結婚したからだろうか。見れば、薬指に結婚指輪がある。

「ねえ、お母さんがかわいそうだわ」

「忙しくたって、ほんの少しくらい顔を見に行つてあげて」

聞こえるのは彼女の声ばかりだ。鶴岡氏は先ほどから黙りこくつたまま、なにも言わ**A**ない。

やがて、吐き捨てるように言う。

「忙しいんだ。バレンタインが終わるまでは、店を空けられ**B**ない。それから考える」

「でも、バレンタインまでまだ半月もあるじゃない。ほんのちよつとだけでも……」

「店をオーブンしたばかりだし、今が**X**だ。そんな暇はない」

「そんな暇って……」

彼女は①**絶句**した。うつすらと涙ぐんで下を向く。

「お願い……もう、あんまり時間がないの。お医者様が、いつどうなつても不思議はないって……」

いきなり彼はカウンターを拳で叩いた。

「なら、なぜ、もっと早く言わなかった。ベルギーにいたときも、日本に帰つてからも……」

「それは、お母さんが、お兄ちゃんは大変なときだから、心配をかけちゃいけ

Cないって……」

「それで、今更言うのか？ 時間が**D**ないって。いいかげんにしてほしいのはこっちだ」

彼は唇をきりりと噛んだ。そしてコートをつかんで立ち上がる。

「帰る。時間ができたら、病院に行く」

「お兄ちゃん！」

彼は**振り返りもせず、店から出ていった**。カウンターの上には、※2 シェーブルのサラダが手もつけられずに置かれていた。

彼女は顔を覆つて下を向いた。②唇が小刻みに震えていた。

席に残された妹は食が進まず、料理もデザートも残していた。シェフが見かねてホット・ワインをすすめ、妹はそれを受け取る。

彼女はグラスの熱さを味わうように、両手で持って息を吐いた。香りを嗅いでから、そつと一口飲む。

「おいしい」

先ほどまで、強ばっていた彼女の表情が少しほころんで、見ているぼくも胸を撫なで下ろした。

だが、彼女の顔はまた険しくなる。シェフの顔を見据えてこう言った。

「あの……ひとつ聞いてもいいですか？」

「なんなりと」

「こんなふうにお店を持って、それが繁盛してしまうと、自分の時間もなくなってしまいくらい忙しくなってしまうものなんですか？」

「それは場合によりますね。うちはもうオープンしてから何年か経つし、スタッフにも恵まれているから、わたしが一日か二日トンスラこいたって、まあ店がつぶれることはないでしょう。でもオープンしたばかりのときは、まだスタッフの教育も行き届かない。忙しいのは仕方がないことですね」

「……癌がんで、いっどうなるかわからない母親を見舞う暇もないほどですか？」

シェフはさすがに驚いた顔になった。

彼女は下を向いて、※3 訥々とつとつと話しはじめた。

「胃癌だったんです。見つかったときには、あちこち転移して、もう取りきれないって……。そのとき、兄はベルギーに修業に行っていて、わたしは呼び戻そうとしたんだけど、母は兄に心配をかけたくないって……」

帰国したときに話すつもりだったのだが、帰国後すぐ、出資者が見つかって新しいお店を持てるという話が浮上ってきて、彼は忙しくなった。母親は「せめて落착くまでは」と、話すのを先延ばしにしたのだ、と彼女は語った。

「そうこうしているうちに、容態が急変してしまって……」

話しているうちに思い出したのか、彼女は声を詰まらせた。

《中略》

「父とは、わたしが幼いときに別れて、その後は女手ひとつでわたしたちを育ててくれました。その疲労が、ずっと身体を蝕むしばんでいたんだと思います。優しい母でした。甘いものが大好きで、お給料日にだけ、シュークリームやチョコレートを買ってくれて、それで言うんです。『わたしはいいから、あんたたちで食べなさい』って。本当は自分も食べたかっただろうに」

彼女は涙を噉すずり上げた。

「兄は変わってしまいました。ベルギーに行くまでは、母思いの優しい兄だった。入院しても見舞いにも行かないなんて、そんな人じゃなかった。ううん、変わったのは日本に帰ってからかもしれない。ベルギーからは、よく母に手紙と向こうのチョコレートを送っていましたから」

彼女は力無く、首を振った。

「なにが、兄を変えてしまったんだろう」

今まで黙っていたシェフが、口を開いた。

「わたしは、お兄さんは変わっていないと思いますよ」

彼女は驚いたように目を見開いた。

「え、でも、見舞いにもきてくれないんですよ？ 変わっていないなら……まだ母を愛しているのならどうして……」

「③ 割り切れないんですよ」

シェフは一度奥に引っ込むと、※4 〈ノンブル・プルミエ〉の箱を持って戻ってきた。それを彼女の目の前に置く。

「お兄さんの作ったチョココレートを食べたことありますか？」

彼女は首を横に振った。

「どうぞ。もうほとんど食べてしまってますが」

彼女はおそろおそろチョココレートを口に入れた。

「……おいしい……」

「でしょう」

シェフは、まるで自分の手柄でもあるように微笑した。

「それにしても、変わっていると思いませんか。この箱、二十三個入りなんですよ。ほかにも十九個入りとか、二十九個入りとかそんな数の詰め合わせばかりだそうですね。変わった店ですよ」

ぼんやりと箱を見つめている彼女に、シェフは語り続けた。

「どうして、そんな数なんだろう。単なる悪戯いたずら心なんだろうか、と思っていました。が、あなたの話を聞いてわかりました。これは、④ あなた方のお母さんのような人たちのためなんだって」

「母のような……？」

「そう。もしかして、もう少なくなつたかもしれないけど、たしかにどこかにはいる、『わたしはいいから、あんたたちで食べなさい』と言う親のため。食べる人間がふたりであろうと、三人であろうと、必ず端数が出る数で、詰め合わせを作ったんじゃないですか。人数で割り切れず余つたなら、『わたしはいいから』と言っていた人も食べてくれるのではないのでしょうか」

彼女は放心したように呟いた。

「ええ……母は……ひとつ余つたときにだけ自分も食べました。わたしたちが喧嘩けんかしないようにって」

「そんな詰め合わせを考えるお兄さんが、変わってしまったと思いますか？」

「でも……じゃあ、どうして！」

どうして彼は母親の見舞いに行こうとしないのだろう。そう問いかける彼女に、

シェフはもう一度先ほどのことばを口にした。

「⑤ 割り切れないんですよ」

「割り切れない……？」

「そう。たぶん、お兄さんは、お母さんに大好きな甘いものを食べさせてあげたいという気持ちで、今まで頑張ってきたんじゃないですか。自分の息子の作ったものなら、喜んで食べてくれるでしょう。それだけではなく、苦労してきた母親に楽をさせてやりたいという気持ちだって、もちろんあつたでしょう」

だが、知らされないうちに母は癌を患い、知ったときにはすでに明日をも知れぬ病状だった。それどころか、すでに自分の作ったチョコレートを食べてもらおうことすらできなくなっていたのだ。

悲しみだけではなく怒りもあつただろう。そんなになるまで黙っていた母に、間に合わなかった自分に。

そして、まだそんな救いようなない事実と向き合うことができなのかもしれない。

彼女はしばらく黙っていた。ひどく長い沈黙の後、やっと口を開く。

「待っていたら……兄は割り切れるようになるでしょうか」

「それはわかりません。でも、お兄さんを信じてあげる価値はあるんじゃないでしょうか」

彼女はこつくりと頷いた。そして尋ねる。

「もうひとつ食べてもいいですか？」

「どうぞどうぞ」

彼女は白い歯でボンボン・オ・ショコラを嚙った。そして笑う。

「⑥ 優しい味ですね」

(近藤史恵『割り切れないチョコレート』より 一部改)

語注

※1 鶴岡氏……(ノンブル・プルミエ)という有名なチョコレート店のオーナー兼チョコレート職人。

※2 シェーブル……ヤギの乳で作ったチーズ

※3 訥々……途切れがちに話す様子。

※4 (ノンブル・プルミエ)の箱……先日、三舟シェフの指示で「ぼく」が鶴岡氏の店に行き、チョコレートの詰め合わせを購入している。

問7 —線⑥「優しい味」について説明した次の文章の空欄に当てはまる言葉を、それぞれの指示に従って答えなさい。

ここでの「優しい」は、チョコレート自体の味や甘さに対してでもあるが、一方で A (一字) に対する B (一字) の C (漢字二字) がチョコレートに込められていることに対して「優しい」と表現している。

問8 —線「彼は振り返り返りもせず、店から出ていった」について、この時の兄の気持ちとして適切でないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 連絡しなかった母に対する行き場のない腹立たしさ。
イ チョコレート職人の仕事に理解のない妹への呆れ。
ウ 母の容態に気づけなかった自分自身への落胆。
エ 開店したての自分の店がうまく立ちいかない悔しさ。
オ 母に自分のチョコレートを食べてもらえない悲しさ。

三 次の記事を読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して、本文には表記を一部変えたところがあります。

ある国の守の長臣、儉約を専らとして国政を司る **a** をりしも、不用の役の多きを
重臣 に専念して 役職

省ける時、足輕の組百二十人ありけるを、六十人としてこと足るべしと評議一決し
一番下の身分の歩兵 会議

ける時、① 主君の言ひ給ふやうは、「六十人の者には暇をつかはすや」と尋ねらるる

に、「仰せの如くなり」と答ふ。「そのものどもは独身なるか。また両親妻子等ある
おっしゃる通りです

ものもあるにや」と仰せられしに、答へて申す **b** やう、「いづれも親も妻子もあるも

のにて候」② と申しければ、③ 「さあらば暇をつかはしなば、④ 大勢のものどもみ
「ぞいます

な路頭にまよふべし。少なきは多きに替ふべし、へ **A** へはへ **B** へに

かへがたし。今大身の内には ※ 万石ちかく取るものもあるべし。それを二、三人暇
身分や給料が高い者

をつかはしなば、まのあたり三万石ばかりの有余あるべしと仰せ出でられしにより
ちようど

て、その議はやみたりとぞ。

語注

※ 万石……石とは米の単位。当時の武家は給料を米でもらっていた。

(『雲萍雑誌』より)

問 1 〓線 a 「をりしも」、b 「やう」の読み方を現代仮名遣い（すべて平仮名）で書きなさい。

問 2 〓線①「主君の言ひ給ふやうは」について、

(1) 傍線部中の「の」と同じ用法のものとして適切でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 手のわろき人の文書き散らすはよき。

イ さやけき月の出でたらむ夜。

ウ 母の言ひ聞かせたりしことなり。

エ 三年ばかりありて、春のはじめとなりけり。

(2) 「主君」はどのようなことを考えて発言をしたのですか。「主君」の考えとして最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 足軽やその家族の将来

イ 国家の財政が赤字であること

ウ 今後の長臣との信頼関係

エ 浅ましい主君であるという評価

問 3 〓線②「と申しければ」の主語として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 国の守の長臣

イ 足軽

ウ 主君

エ 筆者

問 4 〓線③「『さあらば』から始まる会話文はどこまでですか。終わりの三字を抜き出しなさい。

問 5 〓線④「大勢のものどもみな路頭にまよふべし」とありますが、「大勢のものども」が「路頭にまよふ」ことがないようにする方法を、この会話主はどのように説明していますか。解答欄に合うように、二十字以内で答えなさい。

問 6 空欄へ A 〓へ B 〓に入る言葉の組み合わせとして適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 〓A〓多き 〓B〓少なき

イ 〓A〓少なき 〓B〓多き

ウ 〓A〓長き 〓B〓短き

エ 〓A〓短き 〓B〓長き

問7 この文章の最後の一文として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 良君は仁心もまた薄からざることと、人々申しあひぬ。

イ 良君は初心を忘るべからざることと、人々申しあひぬ。

ウ 良君は虐心もまた限りなきことと、人々申しあひぬ。

エ 良君は慢心を捨てるまじきことと、人々申しあひぬ。

問8 この文章は江戸時代に成立した随筆です。次の問いに答えなさい。

(1) 同時代に成立した作品として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 奥の細道

イ 平家物語

ウ 新古今和歌集

エ 竹取物語

(2) 同じジャンルの作品として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 徒然草

イ 宇治拾遺物語

ウ 万葉集

エ 源氏物語